雷丘の調査（飛鳥藤原第139次）

雷丘は甘樫丘から続く丘陵地帯の先端に位置し、飛鳥地域から藤原京一帯を一望できる高さ約20mの独立丘です。また、古代の幹線道路である阿倍山田道と飛鳥川が交わる交通の要衝に位置しています。『万葉集』に「大君は　神にし座せば　天雲の　雷の上に　廬せるかも」と詠まれた雷丘。今回の発掘は、この歴史上有名な雷丘を整備するための事前調査で、丘の上を発掘するのは今回が初めてです。調査は2005年の10月３日から始めました。発掘面積は約500㎡で、丘の上に十字のトレンチを入れて掘り進めています。

現在の雷丘は、中世（おそらく15世紀頃）に造られた城郭の姿をとどめたものであることがわかりました。その工事は大規模なもので、深さ約２mにおよぶ堀を丘の中央と東側に巡らせ、丘の上は平坦に削られました。中腹には武者走りや腰郭とみられる平坦面を削り出して造っています。この工事により古い時期の遺構は壊されたと考えられます。

また、周辺の調査で埴輪が多く出土していることから、雷丘が古墳である可能性も指摘されていました。今回の調査でも西側斜面から多数の円筒埴輪の破片が出土しましたが、古墳と断定できる遺構はありませんでした。しかし、これらの埴輪は、雷丘の周辺の調査で出土しているものと似ていて、５世紀後半のものです。この時期は雄略天皇の時代ですから、『日本書紀』や『日本霊異記』にも登場する雷を捕えた伝承の時期とも合致します。調査が進むと、７世紀中頃から後半とみられる小型の石室が２基、見つかりました。古代の雷丘の変遷を考えるうえで重要な手がかりを得ることができました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　神野 恵）

中世城郭の薬研堀

甘樫丘東麓の調査（飛鳥藤原第141次）

甘樫丘は飛鳥川の左岸に広がる標高約150mの丘陵です。丘陵の東側では過去に５回の発掘調査がおこなわれています。とくに1994年の調査では、焼土層から７世紀中頃の土器とともに焼けた木材や壁土が出土し、『日本書紀』に記載された蘇我蝦夷・入鹿の邸宅との関連が注目されました。

今回の調査は国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区の整備にともなう試掘調査で８月から開始しています。調査地は丘の麓から北西に入り込む約6,000㎡の平坦な谷地で、遺跡の広がりを確認するために、幅５m、総延長145mの細長い調査区を設定しました。

調査の最大の成果は、谷の広い範囲で大規模な整地層を確認したことと、７世紀の掘立柱建物を６棟確認したことです。調査範囲が限られているために建物全体を確認できたものはありませんが、１棟は桁行５間、梁行２間であること、別の１棟には掘立柱塀が付属することがわかりました。これらの建物は、すべて今回確認した整地層の上に建てられています。

『日本書紀』には、皇極３年（644）「蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を甘檮岡に雙べ起つ」と書かれています。見つかった建物群の正確な時期を特定することはできませんでしたが、この整地層に７世紀前半の土器が含まれることは、1994年の調査で確認した焼土層とともに、この場所が蘇我氏の邸宅の候補地であることを示しています。今年度の調査は11月末に終了しましたが、建物群の年代を確定し、遺跡の全体像を解明する今後の調査が期待されます。なお、11月16日には現地見学会を開催し、4,000人以上の方が訪れました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　豊島 直博）

現地見学会の様子